

推薦（紹介）文

「各小学校における外国語（英語）活動」に従事する学級担当者の皆さんへ。

奥田は、10年ほど前から「イギリスの家庭教育」について調査し、資料を収集し始めた。収集した資料のなかに、最重要な文献が2冊ある。それは、身近に、次の薄い本である。

(1) Peter Milward's *England---Home of Children's Literature*, translated by Hiroichi Koizumi. 2001, Chuou-kouron-shinsha.

(2) James Kirkup. *Mother Goose's Britain*. 1978, Asahi Press.

両者とも、揺籃期のころから、家庭教育の環境のなかで、母や父が赤ん坊を揺りかごに入れてゆすりながら、あの有名な『マザー・グースの童謡集(*Mother Goose's Nursery Rhymes*)』の童謡をうたってくれた体験談を語っているのである。

想起するのは、上智大学名誉教授 Peter Milward の述懐だ。(長い引用文であるがお許しを乞う)

赤ん坊向けのナーサリー・ライムがふたつある。それは、赤ん坊のからだの部分にじかに触れてそれと関連づけて歌うものである。そのひとつは、足の5本の指にことばを合わせて歌うナーサリー・ライムである。

This little pig went to market,
This little pig stayed at house,
This little pig had roast beef,
This little pig had none,
And this little pig cried 'Wee! Wee! Wee!' all the way home.

というぐあいである。赤ん坊には、ひとつひとつのことばも到底分からないことは当然だが、足の指1本1本に合せてひとつひとつのことばを言うので、赤ん坊も、いつのまにか足の指がそれぞれ子ブタになってしまったかのようだ。1年か2年のちになって、本物のブタがどんなものかを知るようになると、ますます印象が深まるのである。

そのふたつめは赤ん坊の小さな手をとって、パチパチさせることは簡単で、本当に愉快である。

Pat-a-cake, pat-a-cake, baker's man,
Make me a cake as quick as you can,
Pat it and prick it and mark it with B,

And put it in the oven for baby and me.

ひと言も赤ん坊には分からないかもしれないが、ことばの音の感じとそれに合せて手を動かす仕草が楽しくてしょうがない。赤ん坊は、楽しい雰囲気の中でやれば、何の苦もなく楽しいものだ。なかでもお気に入りには、どんな動きであっても、規則的な動きに合わせて自分の体を動かされることである。

「子ブタ」の各行は3つのストレスである。最終行は6つのストレスである。
「ケーキ」の各行は4つのストレスである。

提言(1)、このようにして、子供は、英会話のリズムを無意識内に体験しているのである。これは、昔も今も、変わらず『マザー・グース童謡集』が、イギリスの家庭教育の言語教材である。

提言(2)、「各小学校における英語活動」に、『マザー・グース童謡集』を活用することを強く推薦します。各童謡を踏まえて、イギリス人の人間形成の足跡をたどろう。

(平成 27 年 11 月 10 日記す)